

1. ドバイへのアクセス

日本とドバイを結ぶ航空ルートで、最も便利な航空会社はドバイ・エミレーツ航空である。関西空港とドバイ空港間、また中部国際空港セントレアからも1日1便運行している。所要時間は、季節によるが往路は約10時間で、復路は約9時間である。出発時間は現在、関空が23時15分、セントレアが23時と仕事を終えてから出発することができる。翌朝、現地時間の朝5時ごろに到着することから、次の日は朝から仕事に入ることができるし、旅行者にとっても観光時間が十分に取れる。さらに、ドバイ乗り継ぎで翌朝にロンドン、パリなどにも到着することが可能であるようだ。復路にしても、現地時間を真夜中の3時前に出発して、日本には午後5時過ぎに到着することから、かなりハードなスケジュールにはなるが、旅行者にとっては時間を有意義に使えて嬉しいだろう。ちなみに、エミレーツ航空は、搭乗したいエアラインとして大変人気があり、機内全席のシートに液晶のパーソナル・ビデオを導入した初めての航空会社だそうだ。何本もある最新映画に夢中になり寝不足となるので、往路は気を付けたい。客室乗務員には複数の日本人が搭乗している。



クレークを中心に広がるドバイ市街地
小型船はアブラ(Abra)と呼ばれる水上タクシーで、
20人ほどの乗客を乗せて数分で対岸に着く

2. ドバイとは

さて、ドバイという都市をご存知だったであろうか。GCC（湾岸協力会議）を構成するアラブ首長国連邦（UAE）の1首長国である。UAEは1971年に英国から独立したばかりの連邦国で、ドバイ、アブダビ、シャルジャ、アジマーン、ウム・アル・カイワン、フジャイラ、ラス・アル・ハイマの7つの首長国から形成される。

中東のアラビア半島にあり、地理的にはいわゆる「中東」のほぼ真ん中に位置する。ペルシャ湾とオマーン湾に面し、国土の大部分は、平坦な砂漠地帯であり、東部に少し山岳地帯がある。かの有名なホルムズ海峡近くの海岸沿いにあることから、地政学上、原油輸送の戦略的立地にある。国民のほとんどは沿海地方に住む。砂漠気候のため年間を通じて雨はほとんど降らず、6～9月の夏季には気温が50度近くまで上昇するが、11～3月の冬季は平均気温が20度前後と大変過ごしやすく、観光シーズンとなる。ドバイ首長国の人口は約110万人で、そのうちの8割は外国人、5割がインド系住民である。

3. 進化するドバイ

ドバイは、近年、石油収入への経済依存度を低め、東南アジアにおける香港やシンガポールのような中東における金融と流通、観光の一大拠点となるべくハード、ソフト双方のインフラストラクチャーの充実に力を入れてきた。そのような中で、ニューヨークの9.11テロ事件以後、米国に向かって^{ばくだい}いた投資がドバイに還流しだし、また中東情勢が不安定化する中で、石油価格の高騰による莫大なお金がドバイに集まってきたことから、空前の好景気が続いている。

(1) 空海輸送ルートの一大交易拠点

ドバイは、世界最大の人工港ジェベルアリ港と24時間空港のドバイ国際空港を持ち、中東地域の人と物の流れの中核、中東最大の中継貿易都市として栄えている。

1981年に設立されたジェベル・アリ・フリーゾーンには、外国企業への各種優遇制度 ①

100%外国資本による所有可、②法人税・所得税50年間免除（期間は更新可能）、③ローカル・スポンサー（サービス代理人）不要、④資本、利益の本国送金自由、⑤通貨規制なし、⑥外国人労働者雇用制限なし、⑦保税区、⑧長期土地リース可）から、また中東の不安定化から相対的に安全な地域として近年進出が急増し、中東における一大物流拠点となっている。最近の特徴としては、ドバイからイラン経由の陸路によるカザフスタン等中央アジアへの石油関連機材等の輸出が相当増えているとのことである。

また、2005年にはドバイ国際空港とジュベルアリ港を結ぶ都市鉄道の建設が開始されており、2009年9月に開通予定である。さらに、ジュベル・アリ・フリーゾーンに隣接する形でジュベルアリ国際空港（ドバイ第2空港）の建設が着工されており、4,500mの平行滑走路6本を持つ世界最大級の空港となる。このような環境から、同フリーゾーンへの進出を希望する企業はますます増えているが、残念ながら現在は満杯の状況であり、拡張工事が進められている。

(2) 中東のリゾート、オアシス

近年、ドバイは中東における一大観光都市をめざしてリゾート施設の開発にも力を入れている。1年中降り注ぐ太陽と美しい海、荒涼とした砂漠といった自然を楽しむことができるとともに、世界の名だたるブランドショップが入る巨大ショッピングセンターで、ブランド品を格安な価格で買物ができるといった魅力的なリゾート都市である。そして、イスラムの国ではあるが、他の諸国に比べ戒律は厳しくなく開放的であり、観光客を積極的に受け入れている。

ドバイでまず有名なのは、1996年以降、毎年3月にナドアルシーバ競馬場で開催されている、世界最高の賞金額を誇るドバイワールドカップであろう。日本を含め世界各国の最強馬クラスの競走馬が参戦する世界最高峰のG1レースである。そして、ドバイには、中東で初めての緑の芝があるゴルフコースとして知られる「エミレーツゴルフクラブ」がある。欧州プロゴルフツアーの「ドバイ・デザート・クラシック」がここで開催されることで有名である。この他にも名門ゴルフコースがたくさんあり、ゴルファー天国だそうだ。

2005年12月に中東一の規模を誇る巨大複合ショッピングモールの「モール・オブ・ザ・エミレーツ」に隣接して、世界一の広さをうたう「スキー・ドバイ」がオープンした。夏には気温が50度を超えることもあるドバイに本格的な人工スキー場が造られたことから、今やドバイ随一の観光名所となっているとのこと。ちなみに、料金は大人スキー（スノーボード）2時間で約4,500円、ほとんどの用具は借りられる。

また、今、ドバイは世界初や世界最大という冠が付くリゾート開発プロジェクトが目白押しである。椰子の木をイメージした世界最大の人工島「ジュメイラ」「ジュベルアリ」「デイラ」の3つの「ザ・パーム」が建設中あるいは計画されている。2007年に完成予定のジュメイラでは、2,000戸の分譲住宅と40の高級ホテル、商業施設などが立ち並び、地上をモノレールが走り、海底トンネルで結ばれる。さらに、海底にも世界初の人工リーフを造成中だそうだ。また、約300の人工島を世界地図のように配置したリゾートの島「ザ・ワールド」は、島ごとの販売になるようであるが、2008年に完成予定である。また、2008年の竣工をめざして世界で一番高いビル「バージ・ドバイ」が建設中であり、800m以上の高さとなる予定。この他にも巨大なマリナーとレジデンスが一体化した「ドバイ・ウォーターフロント」など夢のあるプロジェクトが着々と進められている。世界の最先端建設技術がこ



「モンゴメリ・ゴルフ・クラブ」から見るドバイの開発状況



中東初の室内型スキー場「スキー・ドバイ」

こドバイに集められ、まるで未来都市が造られているかのようである。

なお、既存の欧米の高級リゾート地と比べ、不動産価格は高騰しているもののまだドバイは割安のようである。またドバイでの不動産購入（フリーホールド指定の特別プロジェクトの高級リゾート物件は外国人・企業の所有が認められている）の大きなメリットの1つに、オーナーおよびその家族にはドバイでの滞在許可証（レジデンスビザ）が発行されるとのことである。



地上の楽園「ザ・パーム・ジュメイラ」。
建設ラッシュが続く

4. 急速なる経済開発に伴う懸念

豊富な資金と首長の強いリーダーシップにより、石油依存経済からの脱却に見事に成功しているドバイ。ただ、急速なる発展に伴うひずみも徐々に散見されるようになってきた。

急増する人口に対して住宅供給が不足し、また過熱する不動産投資により地価が高騰している結果、オフィスを含め居住賃貸相場が急上昇している。（ドバイ首長令により賃貸料更新時の上昇率上限を15%として上昇の沈静化が図られているようではあるが。）賃貸物件を確保することは非常に難しく、その場で即決を求められるため時間をかけて良い物件を探すことは至難の業のようである。そのため、隣国のシャージャやアジマーンが労働者のベットタウンとなり、これにより朝夕の通勤・帰宅ラッシュ時はもとより、日中も人口急増による車の増加から渋滞が慢性化している。20分で行かれるはずのところ1時間以上もかかり、死亡交通事故の発生は中東一ではないかと言われる。

建設現場ではアジア人労働者が増えつつあり、過酷な労働環境や賃金不払いなどを発端としてストライキなどが起きているようだ。急ピッチに建設が進められる中、建築物の瑕疵がなければよいが、決して地震の影響がないところでもないので心配される。

さまざまな夢のあるプロジェクトが続々と計画、実現されているところであるが、これだけの開発が進めば、当然それらに見合う電気、水道、道路、下水道など基礎インフラの充実が求められる。物価が上昇しつつある中、計画に基づくインフラへの対応が問題なく実行されていくか懸念される。



ツインタワーの「ジュメイラ・エミレーツ・タワーズ」とsheikh zayed Rdの大渋滞

5. 最後に

ドバイは今、複雑化する中東において周辺国との微妙な関係を保ちながら、飛躍的な成長を遂げている。現在進行中の大型プロジェクトだけでも4兆円を超えている。今後、このドバイがいったいどのような都市となっていくのか。ドバイ首長は、ドバイに“限界”という言葉はないと言う。これからも、新ビジョンを打ち立て世界を驚かす夢のある巨大プロジェクトが推進されていくのであろうが、未来都市ドバイの姿が見えてきたとき、また本誌特集で取り上げてみたいと思う。

（広報グループマネージャー 山中通崇） 